（2面からのつづき）共同作業所の運営改善や地場産業振興を推進するとともに、融資制度の充実により資金面で経営基盤の強化に努める。就労支援としては、新たな企業誘致や市内企業の成長を支援、巡回職業相談の実施やハローワークの最新求人情報閲覧などにより一人でも多くの就労につなげていく」と回答があった。

今後、各支部のまちづくりプロジェクト会議で出された課題や各支部・地域の実態にそくしたとりくみが必要であり、地元の意見をふまえたうえで協議・検討を重ねていくことが重要であると確認された。

■消防局

消防車の耐用年数がせまっている消防車の買い替えを要求した。

消防局の課題は、職場研修をつうじて職員の人権意識の高揚を図っていくと回答。消防車の買い替えについては、地域のバランスをみながら随時買いかえをおこなってくと回答された。

■水道局

大規模地震に備えた災害対策などの施設設備をおこなうとともに、市民生活を支えるライフラインの強化を努めると回答された。

■財政局

各支部からだされた要求にたいする財源の確保をすすめてほしいと要求した。厳しい財政状況のなかでも、今後も同和問題の解決に向けた住みよいまちづくりの視点にたって関係部局と協議をおこないとりくみをすすめていくと回答された。

■教育委員会

これまで子どもたちの学力を上げるために、さまざまな施策を実施したが、子どもたちの学力（特に中学生）には、一般の子どもたちと比較すると学力差の実態があることを指摘した。また、「実態調査」で明らかになった課題をふまえ、学校側と市教委が中心となって課題を解決していく姿勢をもってとりくんでほしいと要求した。また、奨学金にかかわって、親の経済力によって大学進学を奪われている状況があり、市単独奨学金の給付制への確立を強く要求した。しかし、市単独では難しく、現行の就学奨励制度の改善を県に働きかけると回答された。

30数年にわたる田上武議長、勇退

県共闘会議総会

部落解放和歌山県共闘会議第38回定期総会が9月2日、同和企業センターでひらかれ、労働組合、県連各支部から120人が参加した。

今総会で30数年にわたり議長を務められた田上武・議長が退任となり、新たに杉谷雅史・議長（NTT労組）が就任した。

議長として最後のあいさつをする田上武・議長（総会時）

はじめに、首都圏で放映された報道番組のDVDを視聴した。総会では、来賓の北山芳宏・県企画部人権局長から仁坂吉伸・県知事のメッセージが、平田謙司・和歌山市市民部長から大橋建一・市長からのメッセージが披露された。

つづいて、杉谷雅史・事務局次長（NTT労組）による12年度活動報告、野口宗宏・事務局長（県職労）が13年度活動方針案を、宮本修作・事務局次長（解放同盟）が決算報告・予算案を、阪本嘉一・会計監査（日教組和歌山）が会計監査報告をおこない、議長よりスローガンが提案され、全員の拍手で採択した。

新役員が総会運営委員長より報告され、退任する田上前議長のあいさつをうけ、花束贈呈、記念品贈呈をおこなった。山崎早由里さん（本州化学労組）が「職場・地域に根ざした力強い運動を構築し、人権が尊重される平和で豊かな社会を実現させるために奮闘する」と総会宣言を提案し、閉会した。

■新役員は次のとおり

議長＝杉谷雅史・NTT労組、副議長＝小林茂・連合和歌山、中澤敏浩・解放同盟、事務局長＝野口宗宏・県職労、事務局次長＝渡邊哲也・JP労組、宮本修作・解放同盟

主張

放置される差別への責任は

「差別事件が続発している」とか「あとをたたない」とか毎年、運動方針でとりくみの強化を提起してきた。まさに「あとをたたない」状況が続いている。

今年に入って、大手住宅販売会社による差別調査が発覚した。この会社は「競売仕入チェック表」の特記欄に「同和地区により需要は極端に少なくなると思われます」と記したチェック表を間違って県振興局にファックスして発覚した。

不動産購入をめぐって和歌山県では、一昨年から「家を建てたいのだが、同和地区はどこか」「○○は同和地区か」などの問い合わせの電話が8件、和歌山市や他の行政機関にかけられている。

このような問い合わせ事件の背景には、身元調査や土地調査を目的に依然として、部落に対する予断と偏見が存在し、差別観念が露呈した事件といえる。

過去に土地に関する差別事件として、2007年に発覚した土地差別調査事件は近畿を中心に多くの府県で明らかにされた。大手不動産会社やマンション建設業者、広告代理店が調査会社に依頼し、部落の所在地などの情報を報告書として提出させていた事件である。確認・糾弾会は、調査会社5社、広告代理店13社、ディベロッパー15社に対しておこなわれ「土地購入について部落への忌避意識」が存在していることが明らかになった。

また、戸籍や住民票の不正取得事件が後をたたない現状からも「出自」を探る行為として繰り返されている。「プライム社」による不正取得は、和歌山県で20件、新たに「群馬ルート」では60件を超える不正取得が発覚した。

このように繰り返しおこなわれる「不正取得」や「土地差別調査」事件は、被差別部落に対する予断と偏見が社会意識として存在していることをものがたっている。

最後に、県振興局への差別メール事件は、相手が特定できているにもかかわらず、2年以上にわたって、差別メールが送られつづけている。一向に有効な手だてが打てないのが現状である。また、執拗に差別書き込みをおこなっているブログに対してもなんの対応もできていない。放置される差別への責任が問われている。

狭山事件を考えよう

忘れもしない1974年の10月31日、寺尾判決が出されました。

あの公判闘争の日、甥と息子は10万人集会がおこなわれた東京日比谷野外音楽堂へ参加していました。

私は、地区集会のための芦原文化会館にいき、今日こそはもう何時間もすれば石川一雄さんの無罪判決が出されると信じてみんなで待っていました。そこへ、無期懲役との連絡が入り、その時のようすといえば、怒りや憤りとともに、驚きの大きかったことを覚えています。

これこそが、差別裁判や。石川一雄さんの命はわが命、強く胸に実感しました。これからは、長い闘いになるといって集会に参加していたみんな会場は騒然としました。

部落差別によって24歳の若さで不当逮捕されて50年、石川さんの50年の苦しみを思うと胸が痛くなります。

1日でも早く再審が開始され、見えない鎖をはずすまで、命ある限り私はがんばります。

寺尾裁判長だけは、いくつかの難しい事件を公正な裁判で無罪にしているから、きっと石川さんも無罪になると信じていただけに、あの時のショックが大きかった。悔しくて涙が止まらなかった。

裁判官も部落差別するのかと嫌な世の中だと思いました。狭山事件の不当逮捕がなければ、石川さんの人生は今と全く違うものになっていたでしょう。

このようなえん罪事件を繰り返さないためにも頑張らなくてはならないと思います。

（清水節子）

文化の窓

「e love smile」

著　島田　妙子

両親の離婚で児童養護施設に入所、父の再婚で家庭に復帰するが、実父と継母の壮絶な虐待で何度も命を落としかける著者。どんな境遇にも負けず「経験こそ財産なり」をモットーに多方面で活躍中だ。自費出版されたこの本は、読むにはかなりの覚悟が必要だ。なぜなら、本当に「壮絶」な虐待が記されている。

詳しくは、県連・教宣部まで
TEL 073－473－2301